Daily Chronicle

流されゆく日々

連載 9840回

正月休みに読んだ本⑦

五木 寛之

（昨日のつづき）

疲れたときには、海外のミステリーを読む。チャンドラーや、ハメットや、ガードナーを読んだのは半世紀も昔の若い頃である。『ロング・グッドバイ』などは、まだ書店で見かけるが、ハメットになるでいくものなのだ。

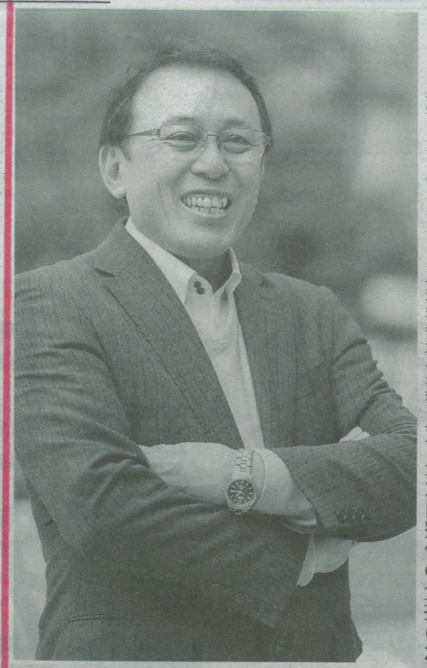
この正月には、2冊の文庫を読んだ。一冊はじめての作品である。ハラルト・ギルバースという作家の『ゲルマニア』（酒寄進一訳／集英社文庫）は、結構ぶ厚い本だ。敗戦前の1944年のベルリンを舞台にした近過去のミステリーで、時代背景がおもしろい。最近は、この手の小説がかなていたような印象があるが、敗戦まぎわかとなると、ドイツ人もある程度めざめてくる。ましてノルマンデー海岸に連合軍が上陸し、ベルリンへの無差別爆撃が日夜つづくと、さすがにヒトラー信仰もゆらいでくる。その辺の国民感情の揺れが伝わってきて、そこがこの長篇の魅力だろう。

貴美子

敗戦まぎわのドイツにも、かなりのユダヤ系市民が残っていた。ドイツ人と結婚していたり、なんらかのコネのある人間たちである。胸にユダヤの星のマークをつけさせられた彼らの、薄氷を踏むような生活ぶりが丹念に描かれて、ユダヤ人差別の問題が政策だけでなく、市民レベルでの憎悪感情と結びついていたことがよくわかるのだ。ミステリーとしては、連続殺人を追うユダヤ人元警部と、ナチスの将校の動きが今ひとつだが、とりあえず風俗小説として興味ぶかく読んだ。

外国のミステリーが、時にはうっとうしく感じられたりするのだが、とにもかくにもそのエネルギーの強烈さには圧倒され、同時にやや面倒くさい気もするのだ。もっと省略する工夫があってもいいように感じられてくるのである。とりあえず、本筋以外の部分で読ませるというのも才能だろう。ドイツには歴史的な人種的偏見の底流があるのかもしれない。メルケル首相もこれからが大変だろう。

もう一冊は、3度目に読んだネルソン・デミルの『王者のゲーム』（白石朗訳／講談社文庫）。3年ぶりくらいで読んだが、ストーリーを忘れてしまってい



製薬会社は、アリセプトには下痢などの消化器症状があるので低用量で使用を開始するが、通常量は5ミリグラムでありそれ以下では効かないと主張しているという。製薬会社が薬に対する増量規定を定めてしまうからだ。

しかし、介護の現場からは薬を増量したとたんに認知症患者の興奮が強くなり大変な思いをしたという報告が後を絶たないという。製薬会社は、アリセプトには下痢などの消化器症状があるので低用量で使用を開始するが、通常量は5ミリグラムでありそれ以下では効かないと主張しているという。製薬会社が薬に対する増量規定を定めてしまうからだ。

それでも、この歪みに疑問を感じる医師は少しずつ増えている。そして、患者の個別性を重視した治療を目指す医師の多くが支持しているのが、〝コウノメソッド〟という薬物療法だ。

名古屋市で開院する河野和彦医師が提唱するもので、アルツハイマー型やレビー小体型など認知症のタイプを正確に見極めながら、漢方的な見方を取り入れた処方をしていきます。例えば、認知症の周辺症状を陽性と陰性に分け、徘徊や暴力などの陽性症状がある患者さんはまず抑制系の薬剤で落ち着かせ、その後で失見当識など脳の病変による中核症状を治療していきます。そして、無気力やうつ状態など陰性症状の患者さんは、最初から中核症状の治療を行う。薬も、個別性に合わせた微調整を行っていきます」

本書では、長尾医師も実践するコウノメソッドの詳細も解説している。両親や配偶者、そして自分自身が認知症になったときに正しい治療が選択できるよう、ぜひ知識を得ておきたいものだ。（現代書林　1400円）

患者の個別性を重視したコウノメソッド

いつまでも元気でデイサービス利用を

世界的「現象」が

スター・ウォーズ論

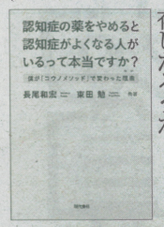
河原 一久著

最新作「フォースの覚醒」が話題のスター・ウォーズ。1977年の公開（日本公開は翌年）以来、世界中のファンを熱狂させてきた同シリーズ

新書 あらかる

著者インタビュー

「症状にかかわらず薬を増量する日本の認知症医療。こんな治療は他の病気ではありえません」



認知症の薬をやめると認知症がよくなる人がいるって本当ですか?

長尾 和宏氏

認知症治療薬の代名詞として知られ、発売から15年が過ぎたアリセプト。

しかし、この薬の服用をやめるだけで、驚くほど症状がよくなるケースがあることをご存じだろうか。

「アリセプトは非常によい薬で、認知症治療薬としてけっして否定されるものではありません。問題は、その使用量です。アリセプトは脳内のアセチルコリンを増やす薬であり、認知機能の維持に効果を発揮する一方、人によっては歩行障害やパーキンソン症状が表れたり、暴力や暴言が起こることもあるんです」

そのため、個々の患者の状態を見ながら、薬の量を調整することが不可欠であると長尾医師は言う。しかし、日本における認知症治療の実態はまったく違っている。

現在、保険が適用される認知症治療薬にはアリセプトの他にレミニールやメマリー、イクセロンパッチなどがあるが、これらの薬には増量規定が定められているのだ。

「アリセプトなら開始量は3ミリグラムですが、2週間後には必ず5ミリグラムに増量することという決まりがあるんです。5ミリグラムに増やして患者さんの調子が悪くなれば、減量して様子を見るのは当たり前のこと。しかし、認知症治療薬は必ず増量しなければならない。こんなおかしな治療は他の病気ではありえません」

〈13ページにつづく〉

ながお・かずひろ　医療法人社団裕和会理事長、長尾クリニック院長。1984年東京医科大学卒業。日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、東京医科大学客員教授（高齢総合医学講座）なども務める。「家族よ、ボケと闘うな！」「胃ろうという選択、しない選択」など著書多数。

どんでん返しの

イラスト・西川 真以子

る。

「闘病生活は長かったんですか」

「二年ほど……それでも最期が眠るように安らかだったので、いくらか救われました」

最期は眠るように、という言葉に胡散臭さがあっかっている。IPアドレスを辿ってあなたに行き着きましたからね。アカウント名は〈クレバーチャイルド〉。聡い子、とでもいう意味なのでしょうか」

更に犬養が直視すると、聡子は視線を逸らした。

「あなたはドクター・デスであれば突然死もあり得るでしょう。しかし、ドクター・デスの手に掛かれば、やはり同じ状態で死を迎えさせることが可能です。彼の方法であれば、患者を眠らせたまま殺すことができる。解剖しない限り、突然死にしか見えない」

ている』やり取りすると、ドクター・デスを正人彼が少しいくのを

今日の新刊

チューリップ

ダシール・ハメット著

小鷹 信光訳

いつものように目覚めたマーガレットは、階下に下りて黒ずくめの男が台所から出ようとしているのに気づいた。男は留守の夫ガイに、レオニダス・ドウカスがホテルで待っていると伝えろと言って去った。マーガレットの友人